

居住空間の変容と住まい方に関する研究

ータイ北部のS村における移住者集団を事例としてー



K10074 頓所 晃尚

Keywords

移住 居住空間 伝統
象徴性 宗教 アニミズム

1. はじめに

1.1. 研究背景・目的

人の暮らしは時代とともに変化し、それに伴い居住空間も変化していく。家族構成や社会的、経済的問題、周辺環境との関係など多面的な影響により住居を含む居住空間はかたちを変えていく。国内でも都市部と村落では様々な環境の違いから、住居形式をはじめ暮らし方に大きな違いができる。

タイ北部に住むタイ・ヤイ、タイ・ルーは、ミャンマーの国境地帯における武装勢力と政府軍の戦闘や強制労働によって困難な生活を強いられた。彼らはその生活から避難し移住を余儀なくされた民族集団である。しかし、移住による大きな周辺環境の変化があるにも関わらず、彼らには変わらない生活様式や伝統的住居形式が存在する。

本研究では、タイ北部のチェンライに位置する一村落を対象とする。移住をはじめ様々な要因による人々の生活の変化と、居住空間および住居形態の変化がどのように相互に影響を与えているのかを考察する。加えて、その中で生きる人々にとって最も重要である居住空間の本質や暮らし方の工夫をフィールドワークを通して考察することを目的とする。

ロクサーナ・ウォータソンの「生きている住まいー東南アジア建築人類学ー」によれば、住居はマイクロコスモスであり、理想的な自然や社会の秩序を反映するものである。住居や集落は、象徴的世界観を映し出す物理的表現である。本研究では、この考えに沿って対象の居住空間を考察していく。

1.2. 研究方法

本研究は、2013年9月4日から9月18日の日程でタイ北部チェンライ県の一村落を対象とした実測調査およびインタビュー調査に基づき分析、考察していく。

(1) 実測調査

タイ・ヤイ、タイ・ルーの世帯の住居(計24軒)を対象とし、平面図、屋敷図を作成した。

(2) インタビュー調査

各世帯および村長にインタビューを行った。インタビュー内容は家族構成、職業、1日のスケジュールなどの基本事項から、儀礼や住居についての内容である。

2. 調査地の概要

2.1. S村の概要

チェンライは首都バンコクから北へ約780kmの位置にあり、ミャンマー、ラオスと国境が接している。

S村の面積は約3km²で、現在の人口は全体で900人である。全住居数205軒中タイ・ヤイ、タイ・ルーの住居は合わせて40軒である。

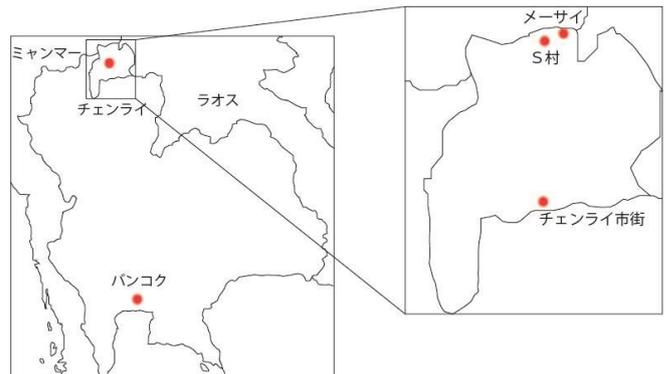


図1 S村の場所

2.2. 民族の概要

今回の調査で対象としたタイ・ヤイはももとは主にミャンマーのシャン州、カチン州に居住し、タイ・ルーは主に中国雲南省西双版纳に居住している。どちらもタイ系民族の一つである。

彼らの多くは過去20~30年前後にタイに移住してきた。ミャンマーとの国境地帯では、現在も政府軍と反政府軍の武装勢力による内戦が続いており、それから避難してきたことが大きな理由である。ミャンマー軍に強制労働をさせられた世帯も多数存在している。

3. 住居

3.1. 伝統的なタイ・ヤイ、タイ・ルーの住居

タイ北部に暮らすタイ系民族集団の伝統的な住居形式は、タイ・ヤイ、タイ・ルーのものも含めて竹や木造の高床式住居である。主な空間構成は、床下空間から階段を上るとチャー(chan)というテラス空間があり、次にトーン(toen)という広間空間がある。更に奥に進むと寝

室と炊事空間がある。それぞれ床レベルが異なり、寝室は神聖な空間として認識され、最も高いレベルにある。

伝統的な住居は、人々の精霊信仰が住居の一部に反映されている。それを表すのは祭壇や柱、室内への出入り口上部にある装飾板、敷地内にある祠等である。広間空間と寝室には祭壇があり、祖霊ピー・プー・ヤーが祀られる寝室の祭壇は最も神聖である。また、ガーレー(Kae Lae)と呼ばれる切妻屋根につける水牛の角をイメージして彫刻された棟飾りや、ハム・ヨン(Ham Yon)と呼ばれる魔除けのための木彫装飾板がある。これらは、祖霊あるいは家長の守護力の象徴と認識されていて、家族の安全を守るために取り付けられる。

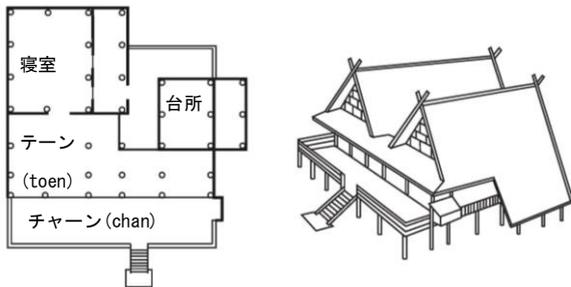


図2 伝統的な北部タイ系民族集団の住居

3.2. 調査対象集団の住居

1980年代後半以降、タイでは木材資源の枯渇による森林伐採の禁止法ができ、RCのラーメン構造で外壁にコンクリートブロックを使った建物が増え、伝統的な高床式の住居が減少している。床レベルも高床や床高1m前後の中床、地床など住居形式が多様化している。

今回調査したS村の住居24軒中高床であった住居は3軒であり、中床が2軒、地床が19軒であった。この背景には、調査対象集団の社会経済的側面が深く関わる。彼らの中には移住してきたために国籍を所持できず、定職に就けない人々も存在する。そのため、十分な収入が得られず、低コストなコンクリートの地床式住居が増加していると考えられる。



写真1 調査対象集団の住居

3.3 宗教的空間と精霊信仰

3.3.1. 祭壇

調査対象集団の住居には2つの祭壇が存在する。住居外にあり、その土地の神であるチャオティー(Cao tii)を祀る祭壇と、住居内にある仏教神やテーワダーを祀るヒンプラ(Hinpra)と呼ばれる祭壇である。

3.3.2. 2本の柱

調査対象集団の住居には、サオエック(sao eek)とサオナン(sao nang)と呼ばれる2本の神聖な柱が存在する。それぞれサオエックは男の柱、サオナンは女の柱という意味を持つ。これらは住居を建てる際に儀礼の焦点となるなど重要である。

3.3.3. 魔除けの札

伝統的な住居では、主に寝室の出入り口上部にハム・ヨンという魔除けの木彫装飾板があると前述したが、調査対象住居にもそれに類似した魔除けの札が確認できた。使用されているのは木材ではなく布や紙で、絵や文字、手形や僧侶の写真等が載せられている。寝室のみならず、住居の出入り口上部など至る所で確認することができた。

3.3.4. 方位観(東・北方崇拜)

タイでは多くの民族集団ごとに独自の方位観が存在し、その方角は儀礼や間取りの構成に密接に関わっている。調査対象地では、東・北側は幸運の方角とされており、住居の間取りに密接に関わる。

3.4. 間取り

調査対象住居の間取りは、基本的には中廊下が存在せず、空間が連結した構成になっているのが特徴的である。調査対象住居は主に半屋外空間、広間空間、寝室、炊事空間の4つの空間が連結していることが実測調査よりわかった。また、少数ではあるが床下空間がある高床式住居も見られた。以下では、これら5つの空間のそれぞれの特徴を大まかに説明する。

3.4.1. 半屋外空間

軒下空間であり、壁がなく開放的である。椅子、テーブルが置かれている場合が多く、接客や食事等に利用する。

3.4.2. 広間空間

広間空間は入り口から入ってすぐに位置しており、様々な機能を持つ。テレビが置かれ、食事やくつろぎの場にもなり、接客空間としても重要な役割を担っている。広間空間には必ずヒンプラが設置され、葬式などの儀礼の際には5人程度の僧侶を招く。儀礼空間としての側面もある。

3.4.3. 寝室

寝室は唯一壁で完全に仕切られている空間であり、サオエック、サオナンが一对になって立てられる。寝室は、神聖な空間として認識されていると考えられる。

3.4.4. 炊事空間

炊事空間は、入口から一番奥に設置される。この空間も完全に壁で仕切られていない。

3.4.5. 床下空間

床下空間は、高床式と中床式の合計5軒の住居のみに確認することができた。床下空間は伝統的な住居の形式に見られる空間であり、接客やくつろぎの場として利用

される。また物置として利用されている場合が多く、中床式2軒のうち1軒は鶏の飼育に利用されていた。

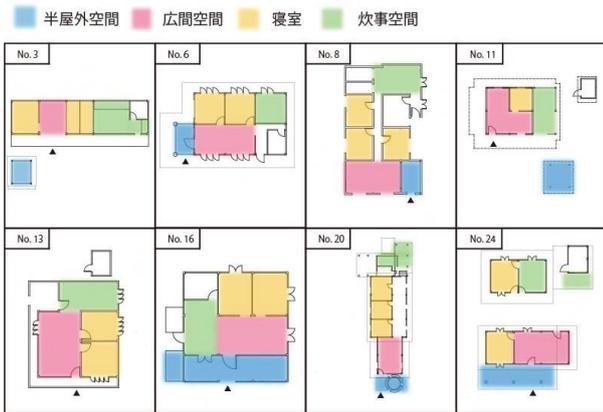


図3 調査対象集団の住居モデル

4. 住居の分析

4.1. 空間構成

調査対象住居全体に見られることは、伝統的な形式である床下空間－広間空間－寝室－炊事空間が基盤であり、どの住居もこの形式から派生していることである。高床式住居がなくなると同時に床下空間やテラス空間が減少しつつあるが、対照的に地床式住居が増加し半屋外空間が出現した。建材にコンクリートを使用している住居が急増すると同時に地床式が増加し、住居形式の大きな変化があるにもかかわらず、半屋外空間にかたちを変えた開放的な空間を残し続けている。これは床下空間やテラス空間のような壁のない開放的な空間は彼らにとって居住空間の本質の一つであることを示し、だからこそ、時代と共に形を変えながらも存在し続けるのである。

また、入り口からすぐ広間空間へつながり、さらに寝室、炊事空間へとつながる動線の順序はすべての住居に共通して存在している。伝統的な形式は完全に消失してしまうわけではなく、場合によっては変化を受け継がれていくことが調査対象集団の居住空間の分析から明らかになるのである。

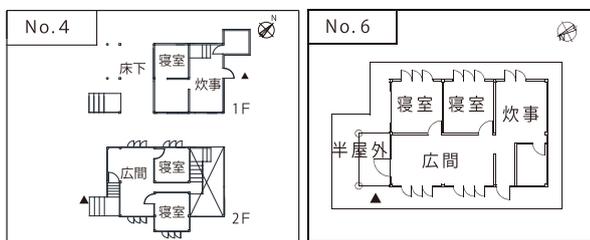


図4 高床式(左)と地床式(右)の住居

4.2. 空間機能

4.2.1. 食事

食事は、寝室以外の全ての空間で行われている。それぞれ半屋外空間が5軒、広間空間が16軒、炊事空間が5軒、床下空間が1軒という結果になった。広間空間が食事に利用されている場合が多いが、炊事空間をダイニングとし

て利用している世帯も見られた。また、半屋外空間や床下空間で外の空気を吸いながら食事をするのを好む世帯も見られた。

4.2.2. 接客

接客は半屋外空間が11軒、広間空間が21軒、床下空間が2軒という結果になった。接客においても広間空間が利用されている場合が多いが、半屋外空間と床下空間は食事のときに利用する場合よりも多いことが確認できる。また、炊事空間は接客には利用されないことがわかった。儀礼時に招く僧侶や村長、親戚、高齢者等の接客は広間空間で行われ、若者や村の外部から来た人は半屋外空間や床下空間で接客される傾向がある。これは広間空間と半屋外空間または床下空間の間に空間的ヒエラルキーが存在しているためと考えられる。

4.2.3. くつろぎ

調査の結果、全ての世帯で広間空間をくつろぎの場として利用していることがわかった。また、半屋外空間は8軒、床下空間は2軒、そして炊事空間と寝室はくつろぎ空間ではないことがわかった。広間空間では主にテレビを見たりする。半屋外空間、床下空間では長時間イスに座って過ごしたり、柱の間にハンモックを取り付けて昼寝をしたりする世帯も見られた。

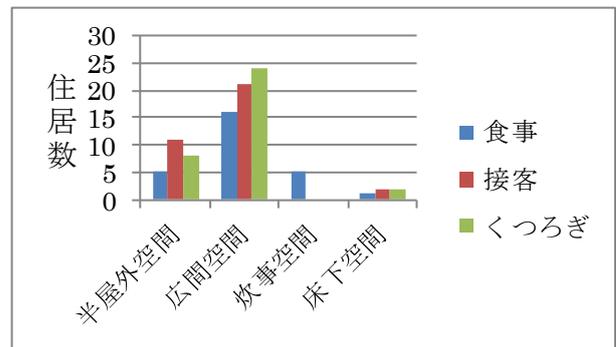


図5 各空間における3つの行為

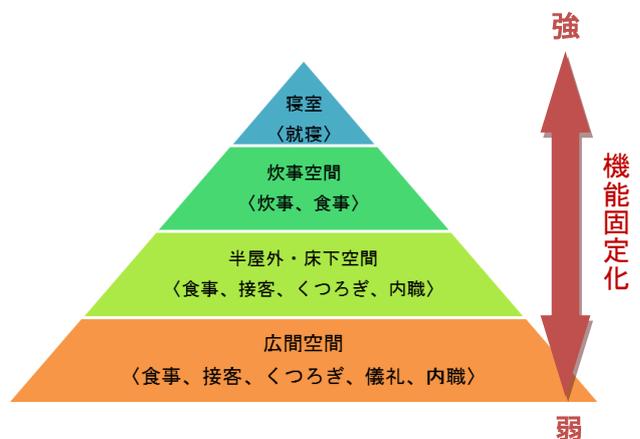


図6 各空間における空間機能の固定化

図6は上記の3つの行為に就寝、炊事、儀礼、内職を加えた図である。就寝と炊事に関しては、全ての住居において、それぞれ寝室と炊事空間で行われている。寝室のような閉鎖的で面積の小さい空間は機能の固定化が弱い、対照的に、半屋外空間や広間空間のような開放的で面積の大きい空間は空間機能の固定化が弱いことがわかった。これらは限られたコストや土地面積で生活している調査対象集団が、空間をうまく使いこなすための工夫である。

5. 居住空間に反映される宗教的観念と精霊信仰

調査対象住居には、宗教的観念やアニミズム信仰、社会関係が強く反映されている。その最もわかりやすい事例が祭壇や2本の神聖な柱である。

伝統的な住居の寝室には祖霊を祀る祭壇があると前述したが、今回の調査で寝室に祭壇が確認された住居は、わずか3軒という結果であった。しかし、全ての住居の広間空間で祭壇が確認でき、神聖な柱もほとんどの住居で確認されている。このように、住居は時代によって様々な影響を受け変化していくが、宗教的観念やアニミズムに大きな根底的变化はなく、現在も残り続けている。これは彼らにとっての居住空間の本質の一つであると考えられる。

6. 考察

調査対象集団にとっての居住空間の本質と移住の相互関係を考察していく。

移住は、東南アジアなどの国々にとって歴史的であると同時に文化的な現象である。異国への憧れや成熟への道として移住する人々も存在するが、農業などのように季節に影響されやすく、周期的に移住を繰り返す民族も存在する。それらは「自発的移住」であり、ウォータソンによればそのような移住は、伝統的な文化や住居形式、人種的独自性などの継続性には大きく影響しない。移住していく人々は、自分たちの出身地に強い絆を保持し続けると同時に、常に異なった文化背景を持つ人々と出会う慣れない環境の中で、民族的意識を高めているのである。

しかし、今回の調査対象集団は、ミャンマーの国境地域における武装勢力と政府軍の戦闘や強制労働による生活からの避難のために移住を余儀なくされた。このような移住は「強制的移住」と言っても過言ではないだろう。そのような移住は、伝統的な文化などの継続性にどのような影響を及ぼすのであろうか。

高床式から地床式へと変化していく要因を考えれば、強制的移住による住居の変遷への影響は大きいといえる。移住によって土地や職も満足に手に入れることができない彼らが、最大限にコストを抑え暮らしやすく生活していくために作り上げた住居が地床式である。これは表面的に見れば、建材が木材や竹からコンクリートへ変わ

り、床下空間が減少していったりと伝統的な住居形式とは明らかに違うことがわかる。しかし、たとえば、現在でも空間が連結する伝統的な間取りは少しずつ形を変えながらも残っている。これは今後も失われることなく継続され続けていくのではないだろうか。

また、宗教的観念やアニミズムに着目しても、同様に彼らにとっての重要な居住空間の本質であるため、強制的移住によって継続性が失われることはないと考えられる。彼らにとって「住居に宗教的観念やアニミズムを表すこと」は「住居に住むこと」と同等なほど重要かつ日常的なことであると共に、村落社会で生きていくために必要な秩序であると考えられる。

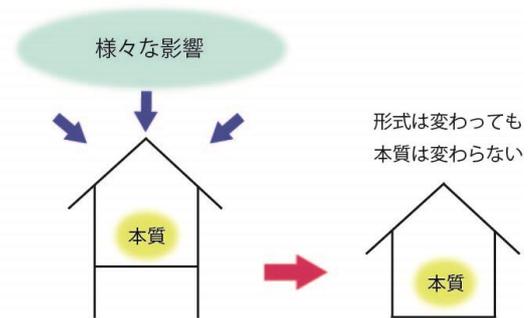


図7 居住空間の形式の変化と本質

7. おわりに

強制的移住によってS村に暮らしている彼らであるが、これまで述べてきた彼らにとっての居住空間の本質は、現在も故郷のものと同様に残り続けている。コンクリートや地床式の形式などの新しい建築形式は、彼らが利便性を求め創り出したものであり、彼らの住居は居住空間の本質と新しい建築技術を融合したものである。伝統は、完全に消失してしまうわけではなく、本質を残しつつ日々新しいものを採り入れ進化しているのではないだろうか。

人間は象徴的な活動を行う動物であり、建築物特に住居には象徴性が表れやすい。彼らの住居でいえば、祭壇は彼らの象徴性を目に見える形で表したものであり、居住者の安全を超自然的な力によって保障するものである。また、同時に彼らのエスニック・アイデンティティを表すものでもあり、それらは強い絆を示す。そして、それらは今後も受け継がれていくだろう。

参考文献

- 1) 田中麻里 「タイの住まい」 2006年2月 圓津喜屋
- 2) ロクサーナ・ウォータソン 「生きている住まい—東南アジア建築人類学—」 1997年 学芸出版社
- 3) 村上忠良 「タイ国境地域におけるシャンの民族内関係—見習僧の出家式を事例に一」 1998年3月 東南アジア研究 35巻4号
- 4) J.J.Boeles Larry Sternstein 「The Kamthieng House」 1966年11月 The Siam Society